

## 統合的な心理学にも目を向けよう

日本大学名誉教授

山岡 淳 (やまおか きよし)

心理学全般の研究をする総合的な学術・研究団体として、1927年に日本心理学会が創設され、次いで日本応用心理学会（教育・臨床・産業・犯罪の4部会あり）が1936年に誕生した。その後、専門の領域・研究方法を取り扱う日本教育心理学会が1952年に誕生し、今では40以上の心理学の単科学会が独立して活動している。心理学の世界に限らず、学問や研究、とくに技術面の急激な進展に伴い、専門化・分化した単科学会がつくられてゆくのは当然の流れであろう。しかしその反面、局部のみをみて、全体を眺める姿勢が失われているのではないか。

心理学と同様に人間を取り扱う臨床医学はよい例である。診療機関の標榜診療科名の数は、1948年には内科・外科など16であったのに、1978年には37の名称が定められ、さらに最近では疾患の部位や患者の性別・年齢層などと組み合わせた多数の名称が可能となった。高齢者の中には、疾患部位が限定されず、統合的・全人的な医療を受けたいとか、西洋医学と東洋医学さらには代替医療も併用したいというひとが多くなった。厚労省では、「かかりつけ医制度」の整備を進めているが、視野の広い人間性のある在宅主治医・家庭医が、高齢者に歓迎されている。

私的なことであるが、旧制高校理科に在学中に、「生と死の境は？」とか「意識はいつからはじまるのか？」などに関心をもっていた。「脳のことを学べる心理学科がある」との噂を聞き、日本大学心理学科（新制）3年次に進学した。恩師渡邊徹教授から、「脳波の実験がお前の仕事」と厳命され、その秋に納入されたGT真空管とバッテリー電源の装置で、当初はノーシールド、記録インキや電極作成などに苦勞させられ、結局私は、脳波計（筐体が木製なので通称木製号）の「付属品」となってしまった。しかし、新皮質系の脳波だけの情報に不満で、自律神経機能をみるために、内々にポリグラフィック研究に手をつけ、結局、統合的心理学の語のとりこになった。

ウィーン大学に留学して、自分が日本文化に無知なこと、諸外国は固有の文化に誇りをもっていることなどを知らされ、近年は文化・芸術の心理学の勉強をはじめた。願わくば、実験室内での基礎的な心理学研究と並行して、自然的な日常社会で「活着している」人間の統合的心理学を、さらにはスピリチュアルや、死の定義や尊厳死などの問題にも、心理学者は今後目を向けてほしい。



### Profile — 山岡 淳

1953年、日本大学文学部心理学科卒業。1958年、同大学大学院博士後期課程単位修了。1961年、日本大学文理学部心理学科講師となり、同大学助教授、教授、文京学院大学人間学部教授を歴任ののち、現在は日本大学名誉教授。

専門は生理心理学、人格心理学、スポーツ心理学。

1966年から1967年まで、ウィーン大学神経心理学研究所に留学。1988年、文学博士。

主な著書は、『生理心理学：こころとからだ』（共著、福村出版）、『誘発電位の基礎と臨床』（共編、創造出版）、『こころの科学』（共著、駿河台出版社）など。